

妖怪の民俗学 Folklore of a ghastly apparition

1K03B193

指導教員 主査 寒川恒夫先生

矢富勇毅

副査 中竹竜二先生

【緒言】

今回、人間が古の時代から畏怖しているものの象徴としての「妖怪」「幽霊」というものに興味を持った。「妖怪」や「幽霊」というものは現代においては非科学的なものであり、その検証としては一種のプラズマであったり、単なるフィクションであるという意見が多い。しかし、江戸時代以前の書物を見たりしているとそれが記述されていたり、また地域によっては現在でも信じられているものが多々存在する。今回それを柳田国夫、井上円了の民俗学的な考えを記した上で自身のこれらに対する考えを論じていくことにする。

【方法】

・柳田国夫の妖怪学

鑑定怪談には二通りあると思う。話す人自身がこれは真個の話だと思って話すのと、始めからこれは嘘と知りつつ話すのとこの二通りある。前者は罪が浅いが、後者は嘘と知りつつ真個らしく話すのだから罪が深い。たとえば怪談書として有名な『新著聞集』『肩心山著聞奇集』『老姐茶話』『一州奇談』などにしても、前の三つはいいと思うが、後の一つはどうも嘘をまことしやかに書いているように思われる。しかし私は日広いことを云うではないが、今大抵の怪談本は真個を書いたのか、嘘を書いたのか鑑定出来る。

【結果】

・井上円了の妖怪学

妖怪研究史において、柳田国男より以前に井上円了が明治二十年代、「妖怪学」についての研究をはじめていた。板倉聖宣の解説記事によると、井上円了は、新潟県長岡市に近い三島郡来迎寺村の慈光寺の住職の息子として生まれた。彼は後に妖怪博士と呼ばれるに至ったが、近年、この井上円了の妖怪研究がクローズアップされてきている。妖怪博士という呼び名をつけられるほどで、東京帝国大学の哲学の教授でありながら、妖怪の問題を正面から取り上げたことで知られている。明治二十年五月に『妖怪学』を著わし、幼いころより妖怪について関心を抱き、大人になってから妖怪の理を究めようとしたことを表白している。妖怪に問するさまざまな事実を収集しだしたのが、明治十六年ごろからであり、ちょうど東京帝国大学文学部二年在学のころであったという。とくに英国では一八七二年に、サイキカル・ソサイアティ（心理研究会）ができており、その種の研究が行われているという。

【考察】

・様々な妖怪および 結章

柳田国夫は恐怖とか畏怖の感情が基本にあって、それがさまざまな形に変化していき、お化け、妖怪を生み出すようになってきたのだという。井上円了は一般に世間では妖怪など、無意味なものであるとか、あるいはくだらぬ無駄話であるとか考えるであろうが、迷信であることには間違いないと思うけど迷信と断言するには、これをはっきり客観化しておかなくてはならないと

いった。このように「妖怪」というものは人間の恐怖の念やその時代の思想を反映したりするというものであると感じた。昔に「口裂け女」や「トイレの花子さん」などといった怪奇話が世に蔓延するや否や、子供達はそれに対し恐怖を覚え自らの行動を律するようになった。今回の研究ではそれらのスピリチュアル的な要素を反映するかのごとく、多くの書物に書かれていた。私の見解では、これらの話は単なるフィクションであり、実在しない、実に単調なものであるが、人間の自身よりも強大な力やそれに準ずる天災的なものに恐怖や畏怖する心がこうした話を作り上げていったのであらうと思う。改善点としては特にないが、現代の世の中でこうした怪奇話を作るのであれば、携帯電話やインターネットに関することが多くなるだろう。現代ではそれらは切っても切り離せない存在であるので多くの人間に恐怖を植え付けるのであれば、そうしたことがキーセンテンスになってくる。